Research Institute for World History
Newsletter
No. 20 June 2013

世界史研究所「ニューズレター」
第 20 号（2013 年 06 月）

CONTENTS

■「日本と韓国における世界史教育の実態の調査研究について」
世界史研究所事務局 —— 1 頁

■「「欧州金融危機の世界的含意」——ベレンド教授の講演について」
南塚 信吾 —— 3 頁

■ RIWH アフリカ奨学金——ご報告とお願い —— 4 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

日本と韓国における世界史教育の実態の調査研究について

世界史研究所事務局

世界史研究所では、去る 2 月 23 日に韓国の国立京仁大学教授 Kang Sunjoo 氏を招いて、日本と韓国における世界史教育の比較研究を立ち上げるための検討会を催した。本研究所所長南塚は、アジア世界史学会 (AAWH) 会長在任中（2010-12 年）、アジア諸国の研究者と教員にそれぞれの国における世界史教育の歴史と現状に関するアンケート調査を呼びかけた。集計結果は AAWH の HP に掲載され、同時に 2012 年 4 月の AAWH ソウル大会でも、その成果を報告し分析するセッションが開催されている。さらに、その折に寄せられた高い関心を受けて、アジア 8 か国の世界史教育の概観を突き合わせる論文集を出版する計

Kang 氏を招いた検討会（2013 年 2 月、世界史研究所）

画が進み、来年の出版が予定されている。こうした動きに基づいて、とくに日韓両国の世界史教育を系統的に調査し比較する構想が持ち上がっていた。

この数年、日本と韓国の関係は、政治や経済はもとより、文化や社会の広い領域で葛藤が顕在化し、緊張の度合いを増している。この現状を緩和するために、歴史教育が果たすべき役割は大きいはずである。互いの国民史を理解し、尊重し合えるような歴史認識の構築をめざす試みは、これまでにも行われてきた。しかし、両国の一部住民に広がりつつある昨今の感情的対立は、この取り組みに限界があることを示している。むしろ、硬直化した対抗の図式を和らげ、新たな展望を押し開くために必要なのは、これまでの歴史観に根本的な反省を迫る発想だと思われる。そして、なによりもそれは、世界史という視座に立って国民史を相対化する歴史観の教育に求められるのではないだろうか。本研究においては、このような世界史教育を日本と韓国の双方で拡充する可能性を模索していく。そのために、東京とソウルで、教育と研究の現場に身を置く者の情報交換の機会を重ね、カリキュラム編成や教授法に関する比較調査を含めて、実践的な議論を積み上げていくことになった。

２月の検討会では、最初に南塚が、日本と韓国の世界史教育について、おもに第二次世界大戦後の変遷を概説した。そのなかで、日韓に共通する現状として、従来のヨーロッパ史中心の記述に比べて、アジア史や自国史の占める割合が徐々に増していることが指摘された。その後の討議では、日本の高校教員の方々の発言を中心に、海域アジアや北東アジアなど、国民史の寄せ集めとは異なる視点から日本列島や朝鮮半島を捉える重要性が確認された。Kang 氏からは、文化的地域間の接合に注目して広い視野から人類の歴史を再構成しようとするアプローチが、韓国の新しい教科書に導入されつつあることも紹介された。

このような意見交換をふまえて、以下の３点を中心に据えて共同研究を進めることが合意された。まず､現行の世界史教科書の比較検討を行う。その際には、韓国では昨年度から新しい高校世界史教科書を用いた授業が始まり、日本では来年度（中学は今年度）から新教科書導入が予定されている状況を踏まえ、最新の教科書を複数取り上げてその傾向と特色を分析し､情報の共有をはかる。次いで、第二次世界大戦後から現在に至る日韓の世界史教科書の構成と叙述の変遷を調査し、歴史研究の折々の成果や国際関係の変化等がどのように教育内容に反映されているのかについて、両国研究者の考察を提示しあう。さらに、このような教科書研究を実践的な場につないでいくために、世界史の授業カリキュラムならびに教授法についても、双方の現職教員がその取り組みを紹介し、意見を交える場を設ける。オブザーバーとして、できれば中国の研究者･教員にも参加を求めたい。

諸地域の能動的で密接なつながりに基づく世界史という視座を通じて、この研究企画が、アジア諸国の人々が柔軟な歴史観を育んで親しく交流することに寄与できれば幸いである。

「欧州金融危機の世界的含意」――ベレンド教授の講演について

南塚 信吾

2013 年 2 月 11 日、世界史研究所において、UCLA のイヴァーン・T・ベレンド教授が「青天の霹靂？―― 2008-2012 年のヨーロッパ経済危機」というテーマで講演を行った。

教授は、まず、今回の危機は USA に始まるものだという J. スティグリッツの説に対して、実際のところ、レーマン・ブラザーズの崩壊以前にすでにヨーロッパにおいて危機が始まっていたのだとする説を対置して見せた。つまり、アイスランド、ギリシア、アイルランドの三国において、すでに危機は進行していて、レーマン危機はこれをいっそう深刻にしたのだという。教授はスティグリッツの反グローバリゼーション的立場に共感を持っているのであるが、ここでは、アメリカ中心に考える方法に批判を向けている。そして、レーマン以後の危機の進行については、グローバリゼーションとネオ・リベラルのエコノミストが「原因」であったとする。この二つのもとで、経済は実態的な発展をせず、金融的なセクターが一方的に伸びて、経済は金融に支配されるようになった。その金融支配のためにあらゆる規制が排除されたのであった。教授は、ネオ・リベラルのエコノミストに厳しい批判を加えている。たとえば、シカゴ学派のロバート・ルーカスなどを挙げて、「マクロエコノミックス」は経済循環や不況の問題を克服したとし、国家による規制や介入は「農奴」への道だと述べていたことを批判した。

このような中で EU を考えると、教授は、EU は統一的金融政策なしに通貨統合を行い、領域も過度に広げすぎたと見る。そこで、腐敗や脱税がひろがり、とくに「周辺」で金融危機が深まり、EU 内での生産性の格差が生じた。そのような問題を抱えながら、EU 内にも、「ハイパー消費主義」なるものが広がった。アメリカ的な消費社会がモデルとされて、メールやクレジット・カードなど

講演するイヴァーン・T・ベレンド氏（2013 年 2 月、世界史研究所）

を駆使した消費の「創出」が行われ、「操作された消費」が広がっている。それはとくに「周辺」では著しい。このように考えると、解決策はどこに求められるか。教授は、一定の規制と超国家的統制は必要だという。そして、緊縮措置も採って、緊縮と成長という「二本足」政策を実施すべきであるというのである。この点で、UE の構造についても一定の改革が必要であると見ていて、緊密な統合を進めて発展を主導する「コア」の EU と、それに引っ張られていくルーズな統合下の「周辺」の EU とに分けて、「二重構造の EU」という体制が妥当なのではないかと述べた。

講演後の討論の中で、緊縮政策と成長との関係について問われたとき、教授は、緊縮政策は一時的には後退をもたらすかもしれないが、やがて成長につながっていくはずであり、ドイツ的なラインが妥当なのではないかとした。また、イギリスの EU に対する態度も議論になり、イギリスだけでなく、ハンガリーなどでも反 EU 勢力が力を伸ばしていることを、危惧すると述べた。

おそらく最も重要な問題は、現在のような EU が世界全体にたいしてもつ意味であろう。EU とアフリカ、EU およびアフリカとアジアの関係において、現在の危機にある EU がどのような立場に立つのかという質問に、教授は、アフリカの「安い労働力」とアジア（とくに中国）の「安い生産物」という観点から、EU とそれらの地域との関係を考えなければならないという問題を指摘するにとどまったが、それ以上の問題として追及すべき課題のように思われた。たとえば、EU の「周辺」に現出しているような金融肥大、ハイパー消費、腐敗・脱税などの事態を、アジア、アフリカと比較・関連させて考えるという方向は、教授の講演自体からも見えてくるように思われる。

RIWH アフリカ奨学基金――ご報告とお願い

世界史研究所では、アフリカにおける世界史教育・研究の発展を目的として、2010 年 2 月に現地学生のための奨学基金「RIWH アフリカからの世界史賞 (RIWH Award for World History from Africa)」を設立いたしました。給付先にはナイジェリアの国立イロリン大学が選ばれ、HP 上でも随時経過をお伝えしてきたように、第一期の活動を終え、現在は第二期に向けた準備を進めております。

2010 年 2 月の奨学基金設立後、世界史研究所では有志の皆さまからの募金を賜ってまいりました。それと平行して、イロリン大学人文学部歴史・国際関係学科 (Department of History and International Studies, Faculty of Arts, University of Ilorin, Nigeria) に依頼し、受給学生の募集および同学科の先生方による厳正な選考を進めていただきました。論文審査の結果、第一期受賞者に次の 3 名が選ばれました（年齢は 2011 年当時）。

- ADEPOJU, Ibraheem Ademola さん（25 歳）
- OLOLADE, Emmanuel Olaolu さん（19 歳）
- OYEDIJI, Oluwaseun Babatunde さん（23 歳）

上記受賞学生には、2011 年度の新学年開始にあわせ、奨学金授与証および奨学金 1,500 ドル (USD) をお送りしました。授与証には寄付をお寄せ頂いた皆さまのお名前も記してあります。受賞論文は HP 上でご覧いただけます（URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/japanese/index.php?itemid=196）。

第一期はイロリン大学、本研究所ともに事務処理等にやや手間取りましたが、アフリカの世界史研究・教育に貢献する一歩を踏み出すことができたことに安堵と喜びを感じています。皆さまには、当基金にたいし数多くのご協力をいただき、あらためてここに厚く御礼申し上げる次第です。

本研究所では、今後もアフリカの学生の未来のために微力ながら尽くしていきたいと考えていま

RIWH

RIWH Award
for World History from Africa

SAMPLE

age)
Matric No:
Department of History and Int. Studies,
Faculty of Arts, University of Ilorin (Nigeria)

Date: XX Sep 20XX

Given by: Research Institute for Word History (Tokyo)
世界史研究所
Research Institute for World History

南塚信吾
Director
MINAMIZUKA Shingo

This award is donated by: AZUMA Makoto, HASHIKAWA Kenryu, HASUNUMA Taiko, HIGURASHI Michiko, IKEDA Yuko, KAWAGISHI Emiko, KIBATA Yoichi, KURODA Tadao, MINAMIZUKA Shingo, OSAMI Arikata, SAKURAI Ayako, SANO Tsuneko, TOMINAGA Chizuko, TORIYAMA Nobuko, WATANABE Akiko, WATANABE Isao, YAMAOKA Naoko, YAMAOKA Sachiyo and YUI Dasizaburo.

受賞学生に送られた奨学金授与証（サンプル）

受賞式における皆さん。左から Adepoju さん、Ololade さん、Oyediji さん。両隣は、本基金現地カウンターパートの Peter F. Adebayo イロリン大学人文学部歴史・国際関係学科准教授（左）、同大学国際教育センター長 Olugbenga A. Mokuolu 教授（右）。

す。つきましては、2013 年度新学期から始まる第二期奨学金へのご寄付を下掲の要領で募集しております。

おりますので、継続して皆さまのご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

アフリカ奨学基金第二期（2013 年度）募金

・ひと口　3,000 円

・応募期限　2013 年 8 月 31 日まで

・振込先

さわやか信用金庫　青山渋谷支店（005）
口座：普通預金
口座番号：1124514
口座名義：（特）歴史文化交流フォーラム　代表　南塚信吾

＊ご寄付いただいた方のお名前を載せた奨学金授与賞を作成し、後援者の存在を明記いたします。
＊ご寄付くださった方は、お手数ですが世界史研究所までご連絡ください。

（了）

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2013 年 6 月 13 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所　長　南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問　下村 由一（千葉大学名誉教授）
　　百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員　木村 英明（早稲田大学講師）
　　木村 真（日本女子大学講師）
　　姉川 雄大（千葉大学特任助教）
　　崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
　　鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員　稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
　　近藤 正憲（学術博士）